

# ワコンニュース

川崎市宮前区版 2021年12月24日掲載

## 市政報告

### コロナ禍を覚悟再開発深化への好機に

#### 地域生活拠点としての利便性の向上を追求し みらい川崎市議会議員団 おだかつひさ



おだかつひさ

1961年幸区生まれ、駒場東邦高校、中央大学法学部卒業(地方自治、都市政策専攻)国会議員秘書を経て、2003年市議会初当選。現在5期目。文教委員会委員、大都市税財政制度調査特別委員会委員。好きな言葉「知行合一」。『論を離くる者は 筒内足らざるなり』布局在住

おだかつひさ

2020年8月に国は「新型コロナウイルス危機を契機としたまちづくりの方向性」を示し、従来のまちづくりに「コロナなどの感染症」対策を加味することを示しました。

これを受けて、再開発準備組合から再開発計画(施設計画や機能)の再検証を行いたい旨の申し

入れが市にあり、市の取組方針とスケジュールの見直しが行われました。国が「まちづくりの方向性」の要点は「三つの密」の回避など「ニューノーマル」に対応したまちづくりが必要として、職住近接のニーズに対応したまちづくりの推進

の緑やオープンスペースの柔軟な活用などです。地域生活拠点の深化は、本再開発事業を宮前区の「地域生活拠点の整備」と位置付けています。「地域生活拠点」とは、市民の必要とする「官・民サービス」をワンストップで提供できる受け皿の拠点や言い換え

「コロナ禍での社会状況の変化を受けて、国からさらに「ニューノーマル」に対応した都市政策のあり方」「駅まちづくりの手引き」などが本年になり公表されました。「ラインスタイル」に応じた多様な働き方、暮らし方の提供、

は、駅の隣接地域に商業・業務や都市型住宅、文化・交流機能、子育て支援等の整備方針が示されています。これに区役所、市民館、図書館等の公共機能も整備することで

「駅・駅前広場・周辺市街地を『駅まち空間』として一体的に捉え、『駅まち空間』を魅力的なまちづくりの拠点とする」などの内容です

「駅まち空間」の回遊性・機能連携のイメージ

で理想的な「地域生活拠点」となることを目指しています。今回のコロナ禍で「再検証」が行われたことで、市民の「利便性の向上」が深化したと評価しています。再検証の内容も視野に、現在の再開発事業では、駅舎の改築の方向性が明らかでありませぬ。これまでも駅舎の改築を行い、地下通路などは地上にペDESTリアンデッキなどを整備して市民の駅周辺での回遊性と動線確保することなどを求めてきました。再検証の結果から「駅まち空間」の充実の観点で可能性を追求して行きたいと考えています。なお、本格的な工事開始は、24年度になる見込みです。

